

「経済小説が描いた日本の企業」

会社を読む

佐高信

徳間文庫



かいしや よ
会社を読む

《経済小説が描いた日本の企業》

© Makoto Sataka 1991

㊟ - 10 - 5

1991年3月15日 初刷

著者

佐高

まこと 信

発行者

あら 荒井

おさむ 修

東京都港区新橋四一〇丁一〇五

発行所

株式会社 徳間書店

電話(〇三)三四三三・六二三一(大代)
振替 東京四一四四三九二番

印刷

凸版印刷株式会社

製本

編集担当 山下寿文

ISBN4-19-599280-X (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

会 社 を 読 む

《経済小説が描いた日本の企業》

佐 高 信



徳 間 書 店

目次

文庫版のためのまえがき 7

序に代えて——経済小説が伝えるもの

13 •

第一章 経済小説の新しい流れ

時代を映す「第三の小説」 26

企業原論としての経済小説 39

事実と小説の間 53

第二章 日本の経営と経済小説

経済小説が描いたニッポン 88

経済小説のパイオニアたち 128

第三章 苦闘するビジネスマン

下請け業者の消えない怨念 164

松本清張『湖底の光芒』

日本の前途を揺さぶる「種」の問題 171

城山三郎『勇者は語らず』

ハイテク産業の株式上場ドラマ 178

邦光史郎『一株萬金』

自動車産業のスパイ合戦 186

梶山季之『黒の試走車』

株の妖しい魅力 191

清水一行『小説兜町』

接待稼業の辛い日々 197

三好 徹『宴会屋半平』

大企業を集団脱走した男たち 201

高杉 良『大脱走』

医者と製薬業界へ「怒り」の挑戦状 208

門田泰明『白い野望』

証券界の機構を告発 216

安田二郎『マナー・ハンター』

政界と建設業界の野望 222

広瀬仁紀『談合』

社内イジメの異常さ 228

渡辺一雄『会社を喰う』

戦後最大の株買い占め事件 232

本所次郎『転覆』

業務命令という名の犯罪 239

咲村 観『商戦』

スーパーマーケットのあり方を問う 246

安土 敏『小説スーパーマーケット』

巨大広告代理店の奇怪さ 253

大下英治『小説電通』

銀行合併と政治家の暗闘 260

笹子勝哉『頭取敗れたり』

大蔵官僚の報われぬ闘い 267

江波戸哲夫『小説大蔵省』

メキシコが舞台の国際経済小説 274

杉田 望『国際プラント・ビジネス戦争』

知られざる戦士の生態 277

高任和夫『商社審査部25時』

解説 高杉 良 282

文庫版のためのまえがき

会社はさまざまな数字で表わされるが、数字だけで「会社を読む」ことはできない。会社はヒラ社員、課長・部長等の中間管理職、あるいは役員、社長、会長、さらには名誉会長といった多くの人間たちの集まりであり、彼らの喜び、怒り、嘆き、そして憎しみをも包含して動いているからである。

そうした日本の会社をダイナミックにつかむための格好の「武器」として経済小説がある。この本は経済小説によってあらゆる角度から日本のカイシャを透視したつもりだが、たとえば、京都府八幡市の円福寺に「京セラ従業員の墓」というものがある。希望すれば、京セラの社員は死後ここに入れるのである。

このように、死という最も個人的なものまで日本の会社はからめとろうとする。そうした会社のあり方が国際的にどんな摩擦を惹き起こしているか。深田祐介の『バンコク喪服支店』（文藝春秋）は思いがけない側面から光を当てる。

タイに進出した企業の日本人総務部長がやたらに張り切り、「シャカセイショウ」（社歌斉

唱)とか、日本式の朝礼を押しつけて、タイ人の社員に総反発される。抗議の意志を示すために、彼らは全員、朝礼に喪服を着て現れた。

この「喪服スト」と、通称「社墓^{しゃぼ}」という京セラ従業員の墓を対比する時、「会社全体主義」の不気味さがくつきりと浮かびあがる。

残念ながら、こうしたことは、いわゆるビジネス書には出てこない。むしろ、「小説」の中に「事実」が描かれているのである。

丸紅の社員で、アフリカのジンバブエに滞在した経験をもつ植田草介によれば、「本社」はいつも、現地の実情を知らないで無理を言う。

植田は、その体験を織り込んだ小説『忘れられたオフィス』（講談社）で、ワンマン・オフィスで働く人間が流す汗は「本社の誰^{だれ}の目にも止まることなくアフリカの大地が吸い込んでしまふ」と表現している。企業は、結果として出てきた数字以外を信じようとはせず、「数字の裏で個人が流した汗はコンピューターにインプットされることはない」というのである。そして、ただ、勝手なことを言うてくる本社に対して、「現代の傭^{やと}い兵のようなもの」である商社マンは、ぶつぶつ言いながらも、ゴングが鳴れば戦いを始める。

「商社マンというのは、馬にたとえれば、サラブレッドだ。哀^{かな}しいことだが、競走の場にほうり出されれば、走り出すんだよ。息が切れるまで目一杯走ってしまう」

作中で、ある商社マンはこうつぶやく。

「アフリカとアメリカはフとメのたった一字違いだが、全ての面で天国と地獄程の差があるんだ」と語る主人公がジンバブエでどんな日々を送ったか。これはやはり体験者でなければ書けない小説だろう。

城山三郎は、経済小説の先駆としてプロレタリア小説があると言っているが、半世紀以上前の一九三〇年に、細田民樹は朝日新聞に『真理の春』を連載した。「日本プロレタリア文学集」の『細田民樹 貴司山治集』（新日本出版社）に収められて再刊されたそれは、三井銀行の池田成彬をモデルにした「森井コンツェルンの利者、^{きげもの}森井銀行筆頭常務生野斉信」などが登場し、当時さまざまな反響を呼んだ。

まず、細田を買収して小説の筋を曲げさせようとしたり、映画化に当たって主要な登場人物をはずすような動きがあった。

右翼のボスと政財界の癒着なども書いたので、暴力団にねらわれる危険も出てきて、朝日新聞では拳銃をポケットにしおぼせた護衛が細田を安全なところまで送ったりしたという。

また、細田の回想によれば、ある夜は逆に陸軍参謀本部の中堅将校たちに銀座のサロンに招かれ、「日本の大衆や農民に資本主義の悪というものを教えて下さって本当にありがたい」と感謝されたとか。

プロレタリア作家の書いた小説を軍人が喜ぶという奇異な一幕があったわけだが、少しは鎮静化したかに見える昨今のマネーゲームの狂騒は、『真理の春』が書かれた昭和恐慌のころと

よく似た雰囲気を感じさせる。政財界は、果たして当時より「進歩」しているのか。自信をもつて「そうだ」と言い切れる人はいないだろう。

経済小説では銀行を描いたものが圧倒的に多い。

銀行小説を一番書いていると思われる清水一行は、その後も『頭取の権力』（徳間書店）等の秀作を生み出しているが、東急総合研究所長の新井喜美夫の評論『「日本」を捨てろ』（講談社）に、ある銀行の頭取の話が出てくる。

戦後、自らの手でも割引債券のセールスをするようになったその銀行は、まず、新宿支店を設けた。しかし、客はほとんど集まらない。それで支店長はPRの専門家に相談し、チラシを配ることにした。これが成功して予期以上の効果をあげることができた。

そしてある日、この支店長に頭取からお呼びがかかったのである。業績アップではめられるものと期待して行ったら、支店長は、チラシを手にした頭取に、こう言われたという。

「これはいったいなんだ。いやしくもウチの銀行は日本の基幹産業を支える伝統ある名門銀行だ。最近出てきたスーパーマーケットなどは、わけが違う。こんなみっともないものを出すな」

この頭取の自宅が新宿支店のエリアの中にあつたのだった。頭取に怒鳴られて、支店長は仕方なくチラシを配ることをやめたが、するとまた、客が集まらなくなり、業績も急降下してきつた。それで支店長は、頭取の自宅のある地域を除いて、再度、チラシを配ることにした。その

結果、また、業績はアップしたのである。

そんなある日、再び、頭取からお呼びがかかった。やっぱり、チラシがバレたのかと、場合によっては辞表を出す覚悟で頭取室に入って行くと、頭取は上機嫌で、

「君、ボクの言ったとおりだろう。スーパーなどのマネをしてチラシなど配らなくても、業績はちゃんとあがっているではないか」

と言ったとか。

こうした頭取とは違い、「僕は素晴らしい部下に恵まれたから、レベル以上の仕事ができただ」^{んだ}と述懐する中山素平を主人公にした高杉良の『小説・日本興業銀行』（講談社文庫）は全五巻の大労作である。

中山は頭取をやめる時に、代表権をもつことはもちろん、会長に就任することも固辞し、後任頭取の正宗猪早夫にねばられて一期二年だけ会長となったが、代表取締役名誉会長とか、代表取締役相談役とか、珍無類なる存在が老醜をさらしている現在、中山の潔い出処進退に学んでほしいと思う。

昭和四十年不況の際の山一証券の再建をはじめ、日産自動車とプリンス自動車の合併、新日本製鉄の誕生、あるいは昭電疑獄など、興銀が関わった「事件」を描いたこの大河小説は、そのまま戦後日本産業史とも言える。

マクロからミクロまで、日本の会社を読む経済小説の傑作、力作、労作はその後も続々と生

み出されている。

一九九一年一月三日

序に代えて——経済小説が伝えるもの

経済小説には三つの要素がある。人事小説、情報小説、モデル小説の三つである。

ポール・アードマンの『マネー・パニック'89』（山本光伸訳、サンケイ出版）や杉田望^{のぞむ}の『小説半導体戦争』（講談社）から、ビジネスマンは現在の世界経済や日本経済についての立体的情報を得、高杉良の『小説・日本興業銀行』（講談社文庫）などから、モデルについての生々しい知識を得る。

しかし、何と言っても、経済小説の読者は経済小説を他人事ではない「わが身のこと」として読み、自らの生き方を振り返るのだろう。

朝日新聞前ワシントン特派員、船橋洋一は、「経済小説は新聞の経済記事の行間を埋めるものだ」と喝破した。たしかに、経済小説はフィクションの部分を含むのだが、練達の作家たちは、実際に起こった事件を綿密に取材し、そこに想像力を働かせながら、登場人物の心理描写

をしてきた。それでまず、経済小説の人事小説的要素をさぐってみよう。いわば、経済小説にみる「人事ロジ」である。

城山^{しろやま}三郎に『官僚たちの夏』（新潮文庫）という小説があるが、その主人公、風越^{かぜこし}信吾^{しんご}のモデルといわれる元通産次官の佐橋^{さばし}滋^{しげる}は、「オレは風越ほど権力主義的な男ではないと思うが……」と、ちよっぴり小説に不満をもらす。

たしかに、通産官僚時代に佐橋に仕えた現大分県知事の平松^{もりひこ}守彦は、先日会ったとき、「佐橋さんは部下に殉ずる人でした」と、「風越」とはいささか違う佐橋の印象を語っていた。

もちろん、城山はそれを承知で風越像を造形したのだろうが、この平松の佐橋評を添えて作中の次の風越発言を読むと、人事の妙諦^{みょうてい}とも言うべきものが見えてくる。

「人事の風越」といわれる風越が、やはり「人事の須藤^{すどう}」（佐藤栄作がモデル）と評判の高い大物大臣を迎え、そのニュアンスの違いを新聞記者たちにこう説明するのである。

「あちらの人事は人間をいかにうまく操縦し、いかにうまく自分にひきつけて行くかの人事だが、おれの人事は人間をいかに掘り出すかの人事だ。おれ自身は、むしろ操縦される方さ」

平松は佐橋について、自分たちを大事にするその十分の一でも上に氣を使ってくれればと思つたと言うが、平松自身も、いつか、部下からそう言われるようになっていた。

それは、清水の次郎長の次のような気持ちに通うものかもしれない。「街道一の親分」といわれた次郎長は、勝海舟に、「お前のために命を捨てる人間は何人いるか」と聞かれて、

「一人もおりません。しかし、わっちは子分のためにいつでも命を投げ出せます」と答えたという。

この覚悟があつてこそ、はじめて子分も次郎長のために「命を投げ出そう」と思うのだろう。部下のために、あるいは筋を通すために、大臣とも華々しくケンカをする佐橋を、興銀の元頭取で現相談役の中山素平は「味方まで沈めてしまう」と評したという。

高杉良の実名小説『小説・日本興業銀行』は、この中山が主人公である。自らのことは計らわぬ点で、中山と佐橋は似ている。人事部長を経験した中山の人事作法をこの小説にみてみよう。

栗栖蔵相の秘書をしていたために、昭電疑獄で六十五日間も拘留されて帰って来た三ツ本彦（のちに新日本証券社長）を、一部の反対を押し切って考査役として復職させた中山は三ツ本に、

「興銀マンのすべてがきみを理解しているとは限らんよ。僕なんかも、おそらく相当数の人たちに嫌われてると思うが、全体の半分くらいは味方ならぬ敵かもしれない。ちょっと極端かもしれないが、そのくらいに思つてちょうどいいんだ」と語りかける。

人事部長時代、中山は傭員、補助員、書記など、いろいろあつた身分制度の撤廃を強力に推進したが、それをバックアップした当時の総裁（かつてはこう呼んだ。まもなく頭取となる）、